

# 【消えた石敢当】

山本秀雄

種子島といえば鉄砲を想起し、屋久島と聞けば屋久杉を連想する。鉄砲・屋久杉とも有名で、歴史的に両者は高い知名度を持っている。

古来、種子島・屋久島は一国の扱いをうけていた。現在、西之表が市制を敷いているとはいえ、二島は同郡内で、一市四町がある。海上指呼の間にあつて、二つの島はルーツを共有してきた縁故の上に成りたち、宿命的つながりがあるかにみえる。

中国大陸・南蛮に通ずる海上の路に同じ飛石の役割を果たし、文物も又同じ門戸を通ずるを以て両島は歴史を共有してきた。何百年を経た今でも、生活習慣、年中行事をみるとき、同じ根から生まれたことがはっきりとわかる。

屋久島が種子島家の所領であつた室町時代から江戸初期にかけ、即ち慶長・寛永年間まで、代官は種子島からの役人が当つていた。

『種子島家譜』によると牧・羽生・日高・岩川・渡辺・山崎・荒木等外、種子島側資料（本文献資料第43回紹介）の「屋久島に関する記録」でも取り上げられているが、種子島派遣の役人の最後の引き揚げは水軍だつた。その名も記されている。長期にわたる屋久島勤務の末に、屋久島に居ついた人のなかつたとは云えないし、両島の同姓の多い理由の一つでもあろうが、やがて屋久島は種子島家を離れて島津の直轄地になる。藩の厳しい財政確立に追われて、暗い森の中に由緒も歴史も消え去つたということも事実ではないか。

最も遺憾に思うのは、元禄八年（一六九五）、島津の島役人常駐に当たつて島内の古記録・系図類一切が没収されたことは惜しみて余りがある。以来、屋久島の古記録の消滅がつづいた。

廃藩置県に際しては、屋久島奉行所や手形所の莫大な記録類が余すところなく、島役人

の手で焼却された。宮之浦の川べりに三日三晩くすぶり続けたという古老の物語を何と聞けばよいのか。

加えて、代々の庄屋宅や旧家に蔵された地方文書が『楠川区有文書』を除き、流出した事実である。島民は明治三十七年（一九〇四）、屋久杉の山林下げ戻し訴訟をおこし、国を相手に長期間戦つて敗訴した。大正九年（一九二〇）のことである。その折にも、地方文書は裁判資料として島外に持ち出されて、一物も島には返されていない。

また、島の川口の集落として栄えたのは、宮之浦・安房・栗生・永田の四村に指を折るが、これ等の地は、かつて島奉行所の船番所の置かれたところでもある。外来文化の接点で早くから異国文化を摂取し、その香も豊かであつたらうに、太平洋戦争末期に戦災を受けて、古い文物とともに焼失してしまつた。

以上が、今日、屋久島に古文書がないとい



われる理由である。

上屋久町は昭和四十八年、郷土誌編纂事業を立ち上げ、私も末端にあつて資料収集を手伝ったが、成果は少なかった。しかし、先日『楠川区有文書』原本を久々に拝見する機会を得たが、さすがは島内唯一といわれるだけに、その内容の豊富さ、それに保存状態の確かさには頭の下がる思いであつた。反面、大変に貴重な遺産がいつも簡単に姿を消すこともまた見逃せない。

その例に石敢当がある。

石敢当は、災いを除くために三叉路の突き当たりや橋・門に「石敢当」の三文字を刻んで建てた石碑で、中国の風習が東漸して鹿児島・熊本あたりまで見かけられるという。有名な橋南溪の『西遊記』にも鹿児島島の風習として紹介されている。

石敢当は琉球と海上の道を飛石伝いに、また薩摩・大隈の陸路を東上して京都に入ったという。種子島は勿論のこと、屋久島でも多

く路傍に散見したものである。

昭和四十七年に、屋久島で私は石敢当を十二、三基も確認した。

最近、永田で一つ、宮之浦で五つ、楠川で二つ、安房一つ、栗生一つの計十本について再確認に廻ったが、今やその姿を見ることのできるのは宮之浦、楠川で各二つづつ、四本である。場所が狭い路地にあつて、今日の自動車文化の犠牲となつて消える運命にあるのか。

宮之浦で私が最も懐かしく見た屋久島ツモリ石の石敢当が、先に消えうせているに気がつき、がっかりした。道路工事のために行方は知れず、手がかりもない。紙より強い石にしたらがこの通りである。

心の貧困を言うのではないが、かつての島役人による焚書にも似た古文書の扱いが、島民にいつしか無関心さを強いる結果になつていたとは、寒心に堪えない。

今後、古文書にとどまらず、金石木工品など民俗資料の残存、発見もなしとしないだろう。だいたいにしてほしいものである。

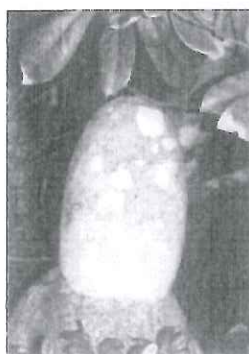
『楠川区有文書』に接し、古紙の遺芳をかいで、ふと、消えた石敢当に思いをはせた次第である。



宮之浦



宮之浦



楠川



楠川